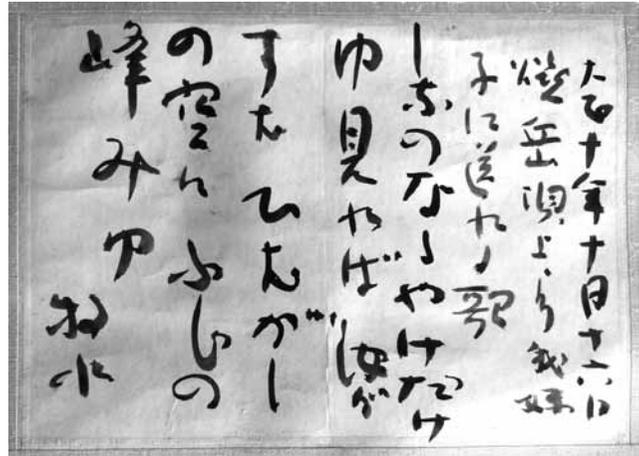


# 沼津市若山牧水記念館

第54号 平成27年3月15日

編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424  
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 <http://web.thn.jp/bokusui/>



大正十年十月十六日  
焼岳頂上より我妹  
子に送れる歌

しなのなるやけだけ

ゆ見れば 汝が

すむ ひむがし

の空に ふじの

峰みゆ

牧水

この軸にされている作品は、大正十年十月十六日に妻喜志子へ出した絵ハガキの次の文面を元にしたものであろう。

いま焼岳の頂上に在り、噴煙、わが身を中心にして四方随所に昇る、すべて岩の亀裂より湧くなり、然らざれば砂礫の地に穴して吹き昇るなり、

四天広明、遠く南々西の空に当りて富士の峰見ゆ、  
信濃なる焼岳の峰ゆ汝が住む沼津の上の富士の山見ゆ

大正十年十月十六日午前十時三十五分 牧水

喜志子宛ての絵ハガキを見た誰かから揮毫を依頼

された牧水は、手許の懐紙(幅二十一cm高さ十四cm)に書いたのだろう。その折、「信濃」「焼岳」を平仮名に、「沼津の上の」を「ひむがしの空に」、「富士の山見ゆ」を「ふじの峰みゆ」と変えた。即興で作った歌を改作したこの作品は、まさに牧水の歌になっており、詞書を「焼岳頂上より我妹子に送れる歌」と単純化して、「我妹子」と親しみを含ませた点など神経が行き届いているように思う。

なお、この歌は歌集『山桜の歌』に収められ、登り来て此処ゆのぞめば汝がすむひんがしのかたに富士の嶺見ゆ

となっている。歌集では、「焼嶽頂上」と題した六首の中におかれているために、信濃、焼岳が省略されたのだろう。私は、この軸にされた作品の方が好きである。よく軸にして残されたと感心した。

ところで、大正十年は、前年八月十五日に移住した沼津の借家での初めての正月を静かに迎え、四月に次男富士人が誕生した。しかし、歌集『くろ土』紀行文集『静かなる旅をゆきつつ』の発行など多忙に過ぎ、体調を崩し、友人たちに勧められて信州白骨温泉への療養を計画した。九月十七日に沼津を出て白骨温泉に着いたのは二十六日。十月十五日に上高地に向い、十六日に焼岳に登った。牧水はよく旅をしたが、山登りはあまりなく、この焼岳が最高峰であろうか。焼岳は標高二四五五m、大正四年の噴火で大正池ができたことで知られる活火山である。(須永秀生)

## 牧水系の歌人と『黒松』鑑賞 晋樹隆彦

牧水のお弟子さんや牧水系の歌人諸氏とは縁あつて長くお世話になってきた。昭和五十二年創刊の『短歌現代』（短歌新聞社）の編集を任されて以来、今日に至るまでである。

牧水の高弟であつた大悟法利雄さんは当時たびたび短歌新聞社に來られていた。大悟法さんといえば、牧水研究家なら誰しも手にしたであろう『若山牧水の秀歌』、『若山牧水伝』、『若山牧水研究』の著者。そして、『若山牧水全歌集』の編纂をされた方である。すべて短歌新聞社刊であつた。

大正期から牧水の身辺を支えてきた大悟法さんはずでに八十歳近くになつていただろう。とてもお元気で怡幅もよく、静かに淡々とお話をされる方であつた。その年齢で人生の集大成とも思われる牧水研究をつぎつぎと纏められ、丹念にこつこつと刊行されていったのだから頭の下がる思いである。

日本の各地を歩いて、牧水の全国におびただしく建っている歌碑の紹介も忘れがたい。ぼくが千葉県銚子よりの田舎出身だとお話すると、銚子から南へ向かつて六十数キロの

九十九里浜の沿道を三日間で歩いたことがあると懐かしそうにお話された。

当時の浜の近くの農道は道が悪く、それこそ車はあまり走っていなかつたとはいへ容易ではなかつたであろう。銚子の牧水歌碑はよく知られている。

栃木で村長をされていたという谷邦夫さんもおりおり新聞社に來られていた。谷さんは大著『評伝若山牧水』（短歌新聞社）を刊行されている。阿部太さんもたまにやつて來た。もちろん牧水の長男旅人さんも奥さんとともに來社されたことがある。

今年九十四歳にもなられる大坂泰さんも、仲間の竹内温さんもたびたび來られていた。新聞社の隣が大悟法進さんの家で、共に牧水系として交わつていたからである。大坂さんは大悟法利雄さんとともに柔道界でも大きな功績のあつた方だ。

後年、ぼくが独立しながらみ書房を興し「短歌往來」を刊行する頃、竹内温さんには特別の励ましをいただき、お世話になつた。週に一度は呑みに誘つていただき、あれこ

れ論じていただいたのである。カロリーの高い品を好む温さんは血圧が高かつたせいであろう、残念ながら早く亡くなられてしまった。今は、高齢だがお元気な大坂泰さんや潮みどり（喜志子夫人の妹）の研究で知られる足利の深井美奈子さんのお二人が、ぼくのよく知る牧水系の歌人である。

牧水系の方でもっとも親しく、もろもろ励ましていただいた方にもうひと方、白石昂さんが存在した。佐賀県生れで、戦後間もなく「創作」に入り、長谷川銀作に師事された。昭和四十年、牧水系の歌誌「長流」の創刊とともに入社。代表歌集に『冬山』があり、ぼくの社でも『无形』を刊行されている。

もちろんぼくが勤めていた短歌新聞社の頃からの付き合い合い、「短歌現代」にも時々作品を依頼した。

ぼくが昭和六十年に独立してからほとんど十日に一度は水道橋駅近くの社に顔を出され、水道橋、四ツ谷周辺で飲食を共にした。すべて白石さんの奢りである。立派な会計事務所の所長で、都内では多くの仕事を受けていた。老舗の飲食店の経理も支えていたにちがいない。

書の名人であるとともに風景画もかなりのレベルの白石さん、牧水系のおおかたがそう



第1歌集『感傷賦』

であるように酒が入るといつもおおらかに牧水の名歌を朗詠された。

もう二十年も前になろう。白石さんに誘われ、伊豆半島の西に位置する土肥を訪れたことがある。

「沼津の牧水記念館や牧水が大正末に泊まったことのある土肥の温泉へ行きたいので、一緒に行きませんか」と誘われたのである。喜んで承諾した。

沼津の駅に下車したこともなく、牧水記念館も土肥もちろん初めて、だからとても嬉しかった。

休日の早朝、新宿駅で待ち合わせ、小田急のロマンスカーあさぎり号に乗車した。

沼津駅から少し歩いて牧水記念館を見学。思っていた通りの瀟洒な建物、中に置かれている書籍が案外に少なかつたことを記憶して

いる。倉庫にどんと取めてあるのだと直感した。

並べられた歌集の一冊に、ぼくの第一歌集『感傷賦』が置かれているのに少々おどろき、嬉しく思った記憶がある。

沼津から二人は高速船に乗り、土肥へ向かった。小さな船だったが、高速だけにあつという間に土肥港に着いた。土肥から名所恋人岬を徒歩でめぐり、そこからタクシーで今夜の宿の牧水荘土肥館へ向かつたのである。

土肥駅の前に比較的大きな竹柏たけかしらの樹のあつたことを覚えている。ぼくの所属する「心の花」は竹柏会。佐佐木信綱が名づけた。竹柏の樹は熊野地方では神木といわれ、新宮の速玉大社たまたまのそばに立っているのを知っている方もいるだろう。ただ、竹柏の樹も先の大雨と洪水でかなりの被害を受けたと聞いている。

宿に入ると白石さんは御上さんと親しげに話し合っていた。玄関右奥に「白玉の歯に」の掛軸のあつたのを覚えている。

通された二階の部屋はまっさらな畳の六畳ばかりの広さ。もちろん畳は最近作り直したばかりとのことであるが、この部屋に牧水は大正十二年の正月、静養のため数日間泊まっていたかたという。

白石さんは日本酒党。広いジャングル風呂

の趣きのある浴場を出ての乾杯となつた。二人で八本くらの徳利をあげたであろう。「二合の二合の酒の…」いつもながらの白石さんの牧水の朗詠を聞くことができた。

小さな声での静かな朗詠は、牧水の歌の特質を知つての調べといつたらいいだろうか。

○

本題に入る。牧水の最終歌集となつた『黒松』は、大正十二年、「土肥温泉雑詠」の詞書のある九首が据えられている。一月中旬から二月初めまで、静養のためと歌集『山桜の歌』の編集のために牧水は前にも出かけていたこの宿に泊まつた。

ひとをおもふ心やうやくけはしきに降り  
狂ふ雪をよしと眺めつ

人妻のはしきを見ればときめきておもひ  
は走る留守居する妻へ

肌よたにややかなしきさびの見えそめぬ四人  
子の母のはしきわが妻

当時の牧水は三十年代後半、人への思い遣りとともに労をかけてきた喜志子夫人への愛情の切なるものがあつた。一連を読んで心奥の恥はづしさ、ふかさを感じたことである。



若山牧水の第15歌集『黒松』

「けはしき」は甚だしいといった意味であろう。中年に至り、出会った多くの人びとを回想し、とともに大雪の情景に浸っている姿が浮かんでくる。「よし」はよし、好しの意と一般的に受け取ることもできようが、「縦し」の意もそこにはあるのであろうか。仕方がないままよ、といった感じである。牧水が意図して用いた形容詞でもあるまいが、上句から下句をダブルイメージさせる効果をとまなっている。

初句はもちろん労をかけてきた妻への氣遣いであろうし、万人への尊敬、つまりオマージュとも受けとれよう。土肥の詞書を抜きにして諳んじた時、一首は広く深く普遍性を持った秀歌として評価できると思いたい。

二首目は正にこもこの労をかけてきた妻・喜志子夫人への単刀直入の調べ。湯上りの美しい女性と廊下ですれちがった折の感慨といったら恣意的に過ぎようか。

三首目は四十代を前にしてなお牧水の初期作の特色である形容語「かなしき」を用いている点に注目したい。

初期作品『海の声』から頻出する「かなしき」の感傷的表現。「白鳥は哀しからずや」「海哀し」「炎か哀し」、あげればきりのないほど用いられた形容語。この作品においては「かなしきさび」と妻の肌を表現しているところに牧水の人生や技法上の到達点を見ることができると思うのだ。

関東大震災のこんな作品も含まれる。

夜に昼に地震ゆりつづくこの頃のころささびのすべなかりけり

余震の日々、人間の力ではかなうべくもない天変地異、先の東日本大震災で主に東北地方の方々の実感した感覚であろう。あるいは

「ころささび」の表現どころではない異次元の苦を背負っていたのにちがいない。生活や身心の異常を体験しなかった牧水でさえ、心中の「荒び」を押しつける術はなかったのだと思われる。

「荒び」は「慰みごと」と解してもよい。人間はいかなる困難な状況においても「荒ぶ・遊ぶ」ところを奥底に秘めているものだ、というのがぼくの考え方であり、牧水もそのように生きてきた歌人であったと思われる。

『黒松』には川魚の「鯉」の多く詠まれているのも特色のひとつ。十月下旬、山梨から八ヶ岳山麓の高原を経て長野県へ行った時の作を引く。

みすずかる信濃の国は山の国海の魚なくて鯉があるばかり

鯉こくにあらひにあきて焼かせたる鯉の味噌焼うまかりにけり

枕ことばを用いての魚の歌は稀であろう。当地で多く食用とした川や池の鯉がまことしやかに詠まれている。

鯉料理といえば洗いと鯉こく、鯉の味噌焼は今日食べさせてくれるお店は少ない。ぼくの知っている葛飾柴又の川千屋(寅さんの「男

は「つらいよ」の団子屋さんの隣りの店、その近くの江戸川沿いの川甚も、三鷹駅近くの松屋でも、かつて相模原にあった大きな鯉の専門店瓢箪緑玉でさえ、味噌焼は食べさせてくれなかった。

酒の肴として、鯉の洗いをもつとも好むほどが知らない鯉の味噌焼、大酒呑みの牧水はやはり珍味好みだったのであろうか。

旅の人牧水、「千曲川上流」の作も忘れない。

昨日今日逢ふものはただおもおもと大根つけたるその馬ばかり

寒しとて囲炉裡の前に厩作り馬と飲み食ひすこの里人は

「つけたる」は「付けたる」つまり大根を運んでいる農耕の馬である。歩みを重ねながら上流をめざす旅人の姿が浮かんでくる。旅人は若い日のように感傷語や詠嘆をもって自然を詠むことを抑え、自然とともに農家のありさまや動物の姿を詠んだ。見たまま、有りの儘を率直に捉えてゆくその頃の牧水の手法であらう。

二首目は遠野に見られる曲り家を思い出させてくれる作品。初句の助詞「とて」がさり

げなく一首に効果をもたらしている。

大正十三年、牧水は故郷へ帰郷する。

山川のすがた静けさふるさとに帰り来てわが労れたるかも

山は尾鈴、川はもちろん坪谷川である。長きにわたる揮毫の旅、雑誌の発行、多くの新聞選歌による体力の消耗はじわじわと牧水に迫っていた。

帰郷したのは父の十三回忌法要のためで、およそ十二年ぶりの帰郷であった。

われはもよ泣きて申さむかしこみて飲むこの酒になにの毒あらむ

大正十五年の作。初句に係助詞を用い、感情を強く打ち出している。「かしこみて」は慎んでの意と受け取ってよい。「泣きて申さむ」と表現したくなるまで牧水は酒を呑む物としてばかりでなく、人生の宝のような存在として対象化しようというのだ。

初句の用法は、この年の

われはもよ酒飲みて早く老いばれぬ酒飲まぬ友はいかにかあるらむ

の一首にも使われている。先の歌で「なにの毒あらむ」と詠みながら

「酒飲みて早く老いばれぬ」と詠むのはいささか矛盾はしているが、その刻々にゆれ動く感情のためであらうか。

この年、牧水は生涯の中でももつとも多難な日々を余儀なくされている。長年の夢だった詩歌総合雑誌「詩歌時代」を創刊したものの資金不足で挫折。その費用を補うべく、九月には遠く北海道まで喜志子夫人同伴で揮毫の旅に出かけている。

八月には千本松原伐採処分問題で先頭に立って松原擁護の文章を寄せていた。自然派の歌人として風土をおびやかす県当局への抵抗精神は牧水の内奥から奔出したものであったろう。

大悟法氏や谷氏の牧水年譜には、「千本松原伐採反対市民大会に出て熱弁をふるい、松原処分問題は遂に立消えとなる」とある。

しかし、牧水は自然を破壊する声明は出しても抵抗精神にもとづく作品は創らなかつた。あくまでも松原を詠み、富士を詠み、自然に終した。

北見国網走港にて詠んだ作品がある。

あきあちの網こそ見ゆれ網走の真黒き海の沖つ辺の波に

「こそ「れ」の係り結び用法、この頃の牧水の技巧の冴えがうかがわれよう。あきあじを獲る網までがよく見えているというのだ。旅中の即興にして、二句は巧みである。

夜半に来て憎き獺わがかこふ囀の鮎をよ  
く盗みにき

冬ならば剥ぎて売らむを獺のこの皮のつ  
やよと言ひて惜みき

高知県の川で獺が見られたのは昭和四十年代はじめ、爾来、誰も獺を見た人はいない。その獺が詠まれているだけでも珍しい一首といえるであろう。

獺はイタチ科でけつこう大きいと聞く。毛皮もラッコ同様に高価で売られていたようだ。「剥ぎて売らむを」と詠んだのは、経済的逼迫感から思わず出た感情というより、それほど獺の皮のつやに見惚れたからだと思う。

昭和二年の作で、「鮎つりの思ひ出」の小見出しのあるところから、作品は大正期に作られたのであろうか。

この年、牧水は妻とともに朝鮮半島に揮毫旅行に出発。約二ヶ月の旅からふたたび九州にて揮毫の仕事の後、故郷坪谷に戻った。体力の衰えは激しく病に臥したのはその直

後のことである。朝鮮での作がある。

この国の山低うして四方の空はるかなり  
けり鶴の啼く

遠干潟いまさす潮となりぬればあさり  
をよめて鶴はまふなる

見たまま、ありのままの朝鮮を詠んでいる。若き日の詠嘆的な感情は消え、四十代の牧水のまこと平明なる手法がうかがえる。

黒松を詠んだ秀歌一首。

わが家を囲みて立てる老松よ高く真黒く  
真直ぐなる松よ

接頭語を使い、松のマ音を活用させて、黒松の男性的な姿を直截的に詠んでいる。

昭和三年、牧水は数え年四十四歳になっていた。旅と温泉巡りは飽くことなく続けたものの、九月十七日急性腸胃炎兼肝硬変にて逝去。

最後の歌には、

酒ほしさまぎらはすとて庭に出でつ庭草  
をぬくこの庭草を

の一首がある。お酒を周囲からストップさせ

られていたのだろう。自らも身体の衰弱を覚  
りながら酒への執着を捨てがたかったにちが  
いない。淋しい作品であった。

「筆者プロフィール」しんじゅ たかひこ



昭和十九年千葉  
の詠の現  
泉野栄町（現  
市）生れ。法政大  
学文学部卒。なが  
らみ書房社長。同  
三十七年に「心  
花」入会。同六十  
年「ながらみ書房」

設立。平成元年に月刊「短歌往来」を創刊。平成  
二十六年歌集『浸蝕』で第十八回若山牧水賞を受  
賞。歌集に『感傷賦』『天心に帆』『秘鑰』。エッセイ  
集『歌人片影―出会いの風景』『短歌往来』で編  
集長インタビューを纏めた『インタビュー現代短  
歌』がある。平成二十六年十月に開催した第  
六十一回「沼津牧水祭・短歌大会」の講師。



第4歌集『浸蝕』

第二十五回

中学生短歌コンクール



第61回沼津牧水祭・碑前祭での表彰式  
平成26年10月19日(日)

第二十五回「中学生短歌コンクール」特選作品の表彰式が、平成二十六年十月十九日、雲一つない秋空の下、牧水の愛した千本松原の牧水歌碑前で行なわれ、選者の一人である須永秀生氏がその一点一点を歌評した。

市内十四校から千六百八首の応募があり、特選九首と入選四十三首が選ばれた。夏休みの課題とされて応募した作品が多

かったためか、中体連や修学旅行、夏祭り等が歌材となった類型歌が目立った。

その中から選ばれた特選九首は、普段見たことがない少年のような父の表情を発見した歌。農業にいそむ祖父のごつごつした指をみつめる優しさが伝わる歌。にがうり、向日葵の花の情景を詠みつも作者の気持ちがいちあがってくる歌。東日本大震災の被災地、原爆の被災地での自分の目でみた確かな臨場感と意思が理解できる歌。あたらしい小さな命へのよろこびの歌。日頃はなかなか言えない母への感謝の歌。そして鋭い感性の相聞歌。どれも選者の共感を呼んだ。

特選作品九首

しゃがみこみ線香花火に火をつける少年  
の目をした父の横顔 山城聖河(暁秀中)  
とげつきのみそきゅうり食べる家族見て  
ごつごつの指組み祖父がほほえむ

土井理沙(大平中)  
犬小屋の緑のカーテンすずしげにけして  
食べないにがうりゆれる

大森瑛仁(第四中)  
輝きはもう消え去って夕闇にさみしさ見  
せる向日葵の花 柏崎結衣(今沢中)

被災地の海岸線には何も無いあの日の怖  
さ今よみがえる 大橋広基(市立中等部)

被爆したアオギリの木が元気よく七十年  
間生き続けている 桑原更英(第五中)  
家の裏かすかに聞こえる猫の声あたらし  
いのちまた生まれたよ

小沼桂大(暁秀中)  
ありがとういつもはなぜか言えないな伝  
えた今日は母の日だった

中川杏子(金岡中)  
あたしの瞳の中にあなたがいる私はいる  
の?あなたの中に... 齋藤るり(大岡中)

入選歌四十三首の中にも注目を集めた佳  
歌が多くあった。その中の二首を紹介する。

こんには ハロー ニーハオ ポン  
ジュール世界を創る魔法の言葉

下池一帆(暁秀中)  
夏休み何かしたいとボランティア意外と  
過酷子供のお世話 矢田夢乃(市立中等部)

応募の締切りが二学期早々の九月中旬とい  
うこともあり、どうしても夏の行事の歌にな  
りがちである。もっと広い範囲から切り取っ  
た歌が増えることを望みたい。そのために対  
策も必要となるのかも知れない。

選に当たったのは、須永秀生、曾根耕一、  
青木朝子、高橋公子の四名であった。

(高橋公子)

## 第十九回若山牧水賞に 大松達知氏の歌集『ゆりかこのうた』



(宮崎日日新聞社 提供)

第十九回若山牧水賞に大松達知氏の歌集

『ゆりかこのうた』(六花書林)が選ばれた。

選考委員は佐佐木幸綱・高野公彦・馬場あき子・伊藤一彦の四氏。

授賞式は、平成二十七年二月九日(月)宮崎観光ホテルで行われ、馬場あき子氏の「牧水の大きい視野と小さい視野」と題する記念講演があった。翌十日、大松達知氏による「牧水と五感」の記念講演が日向市の中央公民館で行われた。

大松達知氏は昭和四十五年東京都文京区生まれ。上智大学外国語学部英語学科を卒業。平成二年に「コスモス」入会。同三年「コスモ

ス」の若手が研鑽を積む同人誌「椋橋」に参加。同四年から一年間米国ウイスコンシン州立大学に学ぶ。東京都内の私立海城中学高等学校に勤務。歌集に『フリカティブ』『スクールナイト』『アスタリスク』がある。

受賞に際し、大松氏は「大きな賞の知らせにただ驚いている。自分のテーマは、実生活から生まれる題材を「言葉」というものの面白さと結び付け、いかに伝えるか。現代社会の対極にある牧水のおおらかさを思い浮かべ、見習いながら、これからも賞の名に恥じないよう努力を続けたい」と話している。

選考委員の各氏は以下のように評している。佐佐木幸綱氏は、妻と子を愛し、酒とプロ野球が好きという、平均的な中年男性の心の動きが丁寧な歌われている。高野公彦氏は、良質でクスツと笑えるユーモアで全体を包んでいる。ものの見方、情景の切り取り方がユニークだ。馬場あき子氏は、それぞれの歌からは、作者の持つ非常に律儀な生真面目さを感じることができる。伊藤一彦氏は、豊かな表現力で歌を通じ現代を生きる四十代男性像の情感を捉えた。熱すぎもせず、冷ややかに冷

めているのでもなく、律儀に職場や家庭で生きている。さらに、そんな自分を相対化する視点を持つていることが、おかしみにつながるのだろう。

歌集『ゆりかこのうた』から自選十五首のうち十首を紹介する。

英語ゆゑにしやべつてしまふくさぐさの、吃音あり十代のこと

中島とまちがへたときそのままでもいいですと言つた中島が怖い

卒業ののちに知りたり伊井君の伊のなかにある尹の意味など

左手には飲、右手には食ありて拍手は顔の筋肉でする

過去形を使つた文を作らせて母の亡きこといまさらに知る

支援物資のなかに棺のあることを読みてたちまち一駅過ぎつ

心音を聞けば聞くほどあやふげな、いのちとならんものよ、いのちとなれ

いつか思ひ出すのだからかおまへを抱いて玄関にずつとずつと立つてゐた夜

焙じ茶の缶をひたすら振る子かなそこに花野が見えるらしくて

立つた日があつて歩いた日があつて父は夏雲のやうにありたし